

日本の新聞の1面コラム

鈴木, 正道

(出版者 / Publisher)

法政大学言語・文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

言語と文化 / 言語と文化

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

43

(終了ページ / End Page)

58

(発行年 / Year)

2010-01-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005679>

日本の新聞の1面コラム

鈴木正道

序

日本の日刊紙の朝刊第1面には、新聞の顔とされる500から600字程度の匿名コラムが毎日掲載される。「天声人語」、「編集手帳」というその表題は『朝日新聞』、『読売新聞』という名をそのまま想起させる。筆者が交代しても、表題が変わることなく掲載されつづけるこれらのコラムは、新聞記事としては特異な存在である。「事実」を伝えることを目的とした報道記事でもなく、また新聞社としての統一見解を発表する社説でもなく、また社外もしくは社内の人間が抱く考えを述べる意見記事でもない。時事に則しながらも特定の問題に集中せずに、いわば思いついたことを語るエッセイである。

短い完結した記事だからであろうか。時の話題に触れながら個人的な感想を述べているためだろうか。1面に毎日掲載されるので見つけやすいということだろうか。とにかく「名文」だからだろうか。これらのコラムが学校などで教材として使われることが多い。新聞社の社員たちも自社の新聞を権威付け、売り込むためにコラムを積極的に利用している。入学試験の問題に用いられたことを喧伝し、はては作文の手本として読者にその利用を勧める⁽¹⁾。

あるものが優れているか否かを問うのに、ただ個人的な好みや直感を基にして論じても実りはない。本論で私は新聞第1面のコラムをいくつかの視点から分析し、その特徴を引き出すことを目指す。「名文」であるとされる一方批判も多いこれらのコラムがいかなる構造的、言語学的特質を持つのかを検討する。テキストの語りの主体という視点からの、他の範疇の記事との比較は2つの日刊紙を対象に既に行っている⁽²⁾、本論では同じ日における5つの全国紙を比較することで、その共通点と差異を探ることにする。従って本論で行う

分析の対象はかなり限られたものとなる。

2009年9月16日に民主党の代表、鳩山由紀夫が総理大臣に任命された。これを受けて翌日の新聞のコラムはどれもこのことを題材としている。本論では、『読売新聞』の「編集手帳」、『朝日新聞』の「天声人語」、『日本経済新聞』の「春秋」、『毎日新聞』の「余録」、『産経新聞』の「産経抄」の2009年9月17日号掲載分を分析する。それぞれインターネット版「ヨミダス歴史館」、「聞蔵Ⅱ」、「日経テレコン21」、「毎日 News パック」、「産経新聞ニュース検索サービス」を用いる。いずれも2009年9月24日における版である。

分析に先立って、私は筆者と語り手を区別することを添えておく。筆者が現実テキストを生産した人間であるのに対して語り手はテキストの内部で、「地」となる言説を引き受けている主体である。小説などの虚構において、筆者と語り手の違いは歴然としている。それに対して日記において両者は限りなく一致に近づくと考えられる。しかし書く人間の主体性と語る主体の対象性の違いはゼロになることはないだろう³⁾。新聞において、報道記事の語り手は人格として姿を見せないという点で、筆者との違いがはっきりしている。社説においては、社員の代表としての複数人格（社員全員か論説委員の集合かという曖昧さを含んでいる）が語り手を構成しており、この点において実際の執筆者（と添削者）との違いが理解される。コラムにおいては、両者の違いはほとんどないかのように思われる。ただし語り手は「私」と名乗ることはなく、時折その存在を示す。筆者は匿名の社員である。ある一定の期間を勤めた後、後任に交代する。ただし「天声人語」の筆者は現在二人いて、交代で書いている。筆者と語り手はやはり一致しない。

1. 内容と構成

それぞれのコラムの内容をどう評価するかは本論の目的ではない。私は、社説や他の記事との差異としてあるはずのコラムがいかなる内容をどのように展開しているかを、やはり各社のコラム相互の差異として位置づける。

2009年9月17日の各紙において、通常2本であるところを倍の量の1本に絞った上で鳩山政権誕生を取り上げた社説を論じることは控える。概略だけを述べると以下のごとくである。保守とされる『読売』と『産経』の社説（『産経』は「主張」という記事名）では、語り手は性急な改革を戒め、特に日米関

係の堅持を要求する。『日経』の語り手も改革に期待しながら対外関係の安定を求める。それに対して『毎日』の語り手は、「果敢に政治の刷新に取り組んでもらいたい」と要求するが、日米関係に関する具体的な言及はしていない。

『朝日』の語り手は、日本の政党史、鳩山氏の来歴に焦点を当て、具体的な政策の注目をほとんどしていない。リベラルとされる2紙において主張がそれほど強く打ち出されていないのは、それぞれの社論の方向に沿った結果が生じたこと、また今後の動向に対する不安が世論に感じられることに対する配慮によるものだろうか。

コラムにおいて具体的な政策はなおさら論じられていない。社説との重複を避け、あくまで個人の視点で語ることがコラムの趣旨なのであろう。「編集手帳」と「産経抄」の語り手がやや社説と同調するように外交における性急さを懸念するにとどまる。全般的にはむしろ何らかの主題を取っ掛かりとして鳩山新首相に話題をつなげている。以下に、文ごとのテーマを流れに沿って記す。丸に入った数字は文の通し番号である。また引用文は句点で区切られていても伝達動詞を持つ1文に含まれる場合には、全体で1文と数える。

『読売新聞』「編集手帳」:

【第1段落】①幕末の歌人大隈言道（おおくまことみち）の酒の歌 ②歌の引用 ③この祝い酒を語り手は愛唱【第2段落】④鳩山首相の祝い酒は？ ⑤「歴史」という言葉の酒 ⑥鳩山首相の言葉の引用「歴史がつくられた」【第3段落】⑦「今日の」憂いの種が目白押し【第4段落】⑧改革と過去の経緯 ⑨忍耐の必要性 ⑩柔軟性の必要性【第5段落】⑪心持冷め加減が酒の旨さ

『朝日新聞』「天声人語」:

【第1段落】①語り手の旧鳩山邸訪問 ②「音羽御殿」 ③鳩山一郎元首相 ④第2 応接室 ⑤椅子とソファとテーブル【第2段落】⑥54年前の保守合同の議論 ⑦党名に関する議論 ⑧政治の中心としての応接室【第3段落】⑨自由、民主、社会 ⑩3語の離合による戦後の政党史 ⑪自民を追い落としての鳩山首相 ⑫「民社国」連立政権【第4段落】⑬すでによく知られた閣僚 ⑭何をやるかが肝心 ⑮すべてはこれから【第5段落】⑯新人議員の大群 ⑰新顔 ⑱彼らの専門性による世直しに対する期待 ⑲利権

や情実による政治の終息を【第6段落】⑳鳩山首相の言葉の引用「失敗もあろうが外向きに」㉑「民」を感じるべし ㉒くらしの喜怒哀楽の現場にあるべし

『日本経済新聞』「春秋」:

【第1段落】①東京の新名所 ②鳩山家旧邸 ③鳩山一郎の建てた洋館を訪れる人々【第2段落】④サンルームにおける中高年グループ ⑤庭園におけるカップル ⑥まるで観光地 ⑦超俗の現首相に似つかわしい邸内の雰囲気【第3段落】⑧世人というもの ⑨政権交代の陶醉の短さ ⑩感心から寒心へ? ⑪大局観を持てるか?【第4段落】⑫ハトの装飾 ⑬舞い上がるハトの群れのスタンドグラス ⑭首相はハトと新閣僚の姿と重ねるか? ⑮首相の言葉の引用「身震いするような感激」 ⑯世人はクール

『毎日新聞』「余録」:

【第1段落】①「整備文」とは役人の文章（翻訳家イアン・アーシーによる命名） ②破壊以外のほとんどの作業を示す言葉【第2段落】③実は破壊も含めて使われる ④漠然とした抽象的な漢語が役人言葉【第3段落】⑤整備文で使われる表現 ⑥分かりやすいが中身のない政治家の話【第4段落】⑦役人言葉と政治家言葉 ⑧これらを覆そうという「政治主導」 ⑨文化革命としての鳩山新政権誕生【第5段落】⑩「脱官僚依存」の閣僚人事 ⑪官僚主導の説明や会見の廃止【第6段落】⑫役人をリードする政治の言葉の必要性 ⑬首相官邸主導の政策決定システムを早く

『産経新聞』「産経抄」:

【第1段落】①演出家、福田陽一郎の語る渥美清 ②上演開始15分後の渥美の肘付き ③その意味（1幕で帰ろう）【第2段落】④渥美の言葉の引用 ⑤「初めの15分が肝心」 ⑥鳩山内閣の幕開け ⑦世界が注目する舞台【第3段落】⑧主役とメインキャスト ⑨米国における100日間の「ハネムーン期間」【第4段落】⑩鳩山内閣の成否も100日間次第 ⑪性急な政策変更は避けるべし【第5段落】⑫渥美の審美眼 ⑬国民の肥えた目 ⑭「脱官僚」と「ムダ遣い見直し」を【第6段落】⑮福田の言う、渥美の話の面白さ ⑯鳩山内閣の出来栄は? ⑰国民はただの観客にあらず ⑱国民

はプロデューサー

筆者たちは当然、2009年9月17日のこの日に1面コラムの担当者が皆、鳩山内閣誕生に関して書くことを承知していて、ライヴァルと重ならないように主題を探したはずである。この状況で『朝日』の担当者と『日経』の担当者は鳩山邸を選んだ。彼らはそれぞれ鳩山邸を訪れたようである。2人が現場で顔を合わせたかどうかは分からない。いずれにせよ、「あらたにす」という読み比べ企画を掲げた『朝日』、『読売』、『日経』の3社のうち2社が新聞の「顔」において同じ日に同じ主題のテキストを掲げたことは興味深い。「天声人語」の語り手は、旧鳩山邸の応接室に焦点を当てて、そこで繰り広げられた過去の政治決定に思いを馳せる。「春秋」の語り手は邸内の様々な場所を訪れる人々を観察しつつ、世人が鳩山首相の政治をどう評価するかを考える。

「編集手帳」の語り手と「産経抄」の語り手は、鳩山首相とは直接関係のない事柄を引き合いに出して話しを進める。前者は、100年以上も前の歌人の歌を引き合いに出し、勝利した鳩山新首相の喜びを酒の醗酏にたとえる。後者は、故人となった俳優の演劇に対する厳しい見方を紹介して、演劇にたとえた鳩山内閣の出来栄を問う。「余録」で紹介される『ペルシャ人の手紙』風の官僚批判は鳩山首相の脱官僚宣言に直接関わるが、鳩山首相は後半になるまで話題にならない。1面のコラムには紙媒体ではその日の表題が提示されない⁽⁴⁾。読んで見なければ何を取り上げているのか分からない。9月17日の「編集手帳」、『余録』、『産経抄』では大隈言道、整備文とイアン・アーシー、福田陽一郎と渥美清が冒頭に登場するため、鳩山政権登場に結び付く展開は、意表をつく効果があるとも言えるが、回りくどい、こじつけだという印象を与える可能性もある。

段落の構成を見よう。「編集手帳」は5つの段落からなり、それぞれ3つ、3つ、1つ、3つ、1つの文を含む。第1段落は歌の紹介、第2段落は鳩山内閣誕生の祝い酒、第3段落はその取り組むべき問題、第4段落は新政権に対する戒め、第5段落は酒の比喩による同じ主張を扱っている。「天声人語」は6つの段落からなり、それぞれ5つ、3つ、4つ、3つ、4つ、3つの文を含む。第1段落は旧鳩山邸の描写、第2段落は54年前の保守合同、第3段落は鳩山内閣の誕生、第4段落は新閣僚、第5段落は新人議員、第6段落は新政権への期待を扱っている。「春秋」は4つの段落からなり、それぞれ3つ、4つ、

4つ、5つの文を含む。第1段落は旧鳩山邸の紹介、第2段落は旧鳩山邸の様子、第3段落は鳩山政権への戒め、第4段落は旧邸のハトの装飾を軸とした同じ主張を扱っている。「余録」は6つの段落からなり、それぞれ2つ、2つ、2つ、3つ、2つ、2つの文を含む。第1段落は役人の「整備文」、第2段落は役人言葉、第3段落は役人言葉と政治家の言葉、第4段落は鳩山政権の誕生、第5段落は脱官僚依存、第6段落は政治主導を扱っている。「産経抄」は6つの段落からなり、それぞれ3つ、4つ、2つ、2つ、3つ、4つの文を含む。第1段落は渥美清のダメだし、第2段落は鳩山政権誕生、第3段落は閣僚の顔ぶれ、第4段落は新政権への戒め、第5段落は国民の目と新政権に対する注文、第6段落は渥美のダメだしに戻って同じ主張を扱っている。

ただし全ての段落がこのようにすっきり分けられるとは言えない。「余録」の第6文を要約している第7文が次の段落に属するのが適切かどうかは疑問の余地があるだろう。「産経抄」では、鳩山内閣の幕開けを扱った第6文と第7文がメインキャストを扱った第8文とは別の段落に属する理由がよくわからないし、また米国の100日間「ハネムーン」を扱った第9文が第8文と同じ第3段落に属し、鳩山政権の100日間に言及した第10文が次の段落に当てられているのを見ると、やや混乱している印象すら受ける。

コラムはエッセイであり、「論理的な」展開を要求するのは適切ではないだろう。そもそも「論理的な」展開とはいかなるものかは、数学の論証でない限り人々の間で意見の一致を見ることもないはずだ。日本のエッセイや小説、4コマ漫画で好まれるとされるのは起承転結である。書き出しを受けて発展させた上で、転換を設けることで読む者を飽きさせないという理由だろうか。「編集手帳」は第1が起、第2が承、第3と第4が転、第5が結、「天声人語」は第1が起、第2が承、第3、第4、第5が転、第6が結、「春秋」は第1から第4までがそれぞれ起、承、転、結、「余録」は、第1、第2が起、第3が承、第4、第5が転、第6が結を成していると考えることができる。しかし段落が4つよりも多い場合は、特に起と承の境がそれほど明確につけられるわけではない。また「転」とは前の部分からどれほど転換があると「転」と称するに値するのかもはっきりとは決めがたい。5紙のいずれのコラムも、4コマ漫画で見られるほど「劇的な」展開は見せない。「産経抄」に関して言えば、起承転結の構成を成しているとはいいがたい。とは言えそもそも起承転結を成さなければいけないという理由はない。

2. 文の長さ

次にそれぞれの文の長さを文字数で測ろう。文の長短は文体を評価する基準の一つとなる。

「編集手帳」：478文字

【第1段落】① 28文字② 30文字③ 44文字【第2段落】④ 39文字⑤ 28文字⑥ 31文字【第3段落】⑦ 70文字【第4段落】⑧ 43文字⑨ 40文字⑩ 85文字【第5段落】⑪ 40文字

1文平均 43.5文字

「天声人語」：633文字

【第1段落】① 16文字② 19文字③ 40文字④ 19文字⑤ 38文字【第2段落】⑥ 51文字⑦ 15文字⑧ 20文字【第3段落】⑨ 9文字【第4段落】⑩ 20文字⑪ 44文字⑫ 15文字【第5段落】⑬ 34文字⑭ 28文字⑮ 17文字【第6段落】⑯ 13文字⑰ 17文字⑱ 52文字⑲ 30文字【第7段落】⑳ 60文字㉑ 35文字㉒ 41文字

1文平均 28.8文字

「春秋」：529文字

【第1段落】① 15文字② 23文字③ 68文字【第2段落】④ 27文字⑤ 19文字⑥ 40文字⑦ 55文字【第3段落】⑧ 26文字⑨ 22文字⑩ 60文字⑪ 33文字【第4段落】⑫ 23文字⑬ 31文字⑭ 35文字⑮ 24文字⑯ 28文字

1文平均 33.1文字

「余録」：666文字

【第1段落】① 51文字② 65文字【第2段落】③ 45文字④ 63文字【第3段落】⑤ 33文字⑥ 75文字【第4段落】⑦ 32文字⑧ 46文字⑨ 29文字【第5段落】⑩ 67文字⑪ 59文字【第6段落】⑫ 36文字⑬ 65文字

1文平均 51.2文字

「産経抄」：718 文字

【第 1 段落】① 37 文字② 47 文字③ 25 文字【第 2 段落】④ 6 文字⑤ 63 文字⑥ 19 文字⑦ 31 文字【第 3 段落】⑧ 73 文字⑨ 58 文字【第 4 段落】⑩ 49 文字⑪ 57 文字【第 5 段落】⑫ 28 文字⑬ 55 文字⑭ 49 文字【第 6 段落】⑮ 48 文字⑯ 39 文字⑰ 16 文字⑱ 18 文字

1 文平均 39.9 文字

「天声人語」の 1 文が平均してもっとも短い。「春秋」との差がどれほどの意味を持つかは統計的調査を行わない限り判断できない。ただ「余録」とは際立って 1 文が短いと言えるだろう。第 4 文と第 9 文は体言止めの文である。体言止めは文に小気味よいスピード感を与えると言う意見と⁽⁵⁾、スペースを節約するための軽佻浮薄な方便だという意見がある⁽⁶⁾。好みの問題だと言ってしまえばそれまでだが、少なくとも積極的に奨励すべき語法ではなからう。「春秋」の第 4 文、第 5 文、第 9 文、「余録」の第 7 文も体言止である。また「天声人語」では主語と述語からなる単文構造も目立つ。「余録」の文が長いのは、一つには第 3 段落までは、他人の本の引用説明であるからである。他人の言説を引くと、語り手自身の言説と区別するために一括りにまとめようという意図が働いて文が長くなりがちである。後半部分も長いのは、筆者の癖なのか、前半部のリズムが引き継がれたのかはやはり統計的な調査がない以上何とも言えない。ただ、特に新聞や雑誌においては、印刷される 1 行のスペースが小さいこと、また全般的に意味の取りやすさが優先されることから、短く単純な構造の文が奨励される。

3. 語りの主体

他の機会に述べたように、新聞や週刊誌の言説においては、語りの主体が明確にされないことが多い。またその度合いが記事により大きく異なる。概して社外執筆者による意見記事やエッセイの場合には主体がはっきりと打ち出されるのに対して、報道記事において主体は姿を消す傾向がある。社説においては 1 人称複数の代名詞が語りの主体と読者の同化を促す。その中で第 1 面に載るコラムは特異な存在である。社員記者が執筆者であるが、匿名で書かれる。語り手は 1 人の人間としてテキスト内に登場することもあるが決して「私」と

名乗ることはない。感情付加の多少なりとも強い表現が用いられることがあるが、語りの主体の所在が不明瞭なので、その引き受け手が明らかでない⁽⁷⁾。以下にこれらの点から検討をする。

3-1. 語り手が主語である動詞文節

各紙のコラムにおいて語り手の動作を表わす動詞文節を探す。下線部がそれである。

「編集手帳」:

第3文「愛唱し、かつ実践している身ゆえ、一世一代の祝い酒に酔う人をたしなめるヤボは承知している。」第4文「[…] 鳩山由紀夫首相が本物の酒を飲んだかどうかは知らない。」第10文「[…] 悪酔いして柔軟性が失われても困る。」

語り手が自分の経験を据えた上で話を進める。終りに近い部分においても自分の判断を示す。

「天声人語」:

第1文「東京都文京区の旧鳩山邸を訪れた。」

冒頭にいきなり主語のない行為文が現れる。「編集手帳」でも語り手の行為を表わす文に主語はないが、「天声人語」では第1文がそれであり、しかも短い文であるだけ一層印象が強い。新聞のコラムとはこういうものだ慣れていて読者にとってはごく自然な文だろうが、そうでない者は戸惑うだろう。他に語り手の動作を表わす動詞は現れない。しかし以下に述べるように語り手の価値や感情を表わす表現は多い。

「春秋」:

あきらかに語り手が主語と設定される動詞文節はない。しかし第7文の「首相もここで育ったというから、そう思って邸内を歩いてみれば『宇宙人』などと表される超俗のおもむきに納得もいく。」において、「思う」および「歩く」のは訪問客一般であるようであり、特に語り手を指しているとも

52

言える。

「余録」:

なし

「産経抄」:

なし

「余録」, 「産経抄」ともに語り手が主語となる動詞文節はない。しかし以下に述べるように、語り手の判断や感情を表わす表現はある。

3-2. 語り手の判断や感情を表わすモダリティの表現

言語表現は、話者が伝えようとする事実を担う要素と、話者の価値判断や感情を担う要素から成る。後者をモダリティと称する。より詳しい定義は研究者によって異なるが、一般に助動詞、動詞、副詞などの指標を持つ要素を指す。モダリティを担う表現は、論文よりもエッセイにおいて、また特に新聞記事においては報道記事よりもコラムに多く見出だされる⁽⁶⁾。扱う対象が極めて限られている本論では、それぞれのコラムにおいて見いだされるモダリティの表現がどのような効果をもたらすかを考えるにとどめる。なおモダリティ表現の分類は主に益岡隆志の『日本語モダリティ探究』(くろしお出版, 2007)に依った。そこで特に扱われていないものでも、私がモダリティと考えられると判断したものは付け加えてある。なお、引用符で囲われた会話文は、会話の発話者のモダリティであるとしてここでは扱わない。ただし、これも現実の会話というよりも引用者による組み立てなおしを経ているので、ある程度語り手のモダリティを含むとも考えられる。

「編集手帳」:

第5文: 「『歴史』という言葉の酒は、かなり聞こし召したようである。」第8文: 「改革はどしどし進めてほしいが, [...]。」第9文: 「[...]」ときに遠回りや足踏みの忍耐を要する場面もあるだろう。」

「天声人語」:

第18文：「[…] 世直しの力になってくれ/よう/か。」第19文「与野党が政策を競う中で、利権や情実で動く政治を終わらせたい。」第21文：「そう、新政権が見聞きし、感じるべきは、[…]。」第22文「[…] どうか応接間の似合わない政権党であってほしい。」

「春秋」:

第1文：「これも東京の新名所なの/だろう。」第6文「[…] 出来事には違う。」第8文「[…] アラ探しの名人でもあろう。」第9文：「政権交代の4文字に酔ってくれるのも今のうち。」第10文「[…] 感心はあつという間に寒心に変わりかねない。」第11文「[…] 大局観を持てる宇宙人なりや否や。」第13文「[…] ステンドグラスだろう。」第14文「[…] 姿に重ね合わせよう/か。」

「余録」:

なし

「産経抄」:

第14文「[…] 優先してほしい。」第18文「[…] プロデューサーなのだ。」

「だろう」(「編集手帳」第9文, 「春秋」第1文, 第13文), 「あろう」(「春秋」第8文), 「ようである」(「編集手帳」第5文), 「よう」(「天声人語」第18文) という断定保留⁹⁾が多い。最後の例は「か」という未定の表現がついている。語り手が予想したこと, 疑問に呈すること, 語り手に見えたことを示すことで, 語り手の存在が読み手に伝わる。同時にその内容を和らげる役割を持つ。「や」(「春秋」第11文) も未定であるが, 後述のように文語であることにより特殊な印象を与える。「かねない」(「春秋」第10文) は可能性表現としての「かもしれない」に準ずるモダリティ表現だと私は考える。ただ「そうであっては困る」という気持ちが含まれる。「違う」(「春秋」第6文) は強い可能性, 推測を表わすモダリティ表現だと私は考える。

「なのだ」(「産経抄」第18文) は説明を表わす。これが断定保留の「~だろう」とつながると(「春秋」第1文) 語り手の慨嘆のようなものを感じさせ

る。

価値判断を表わす「べき」（「天声人語」第21文）は明らかに語り手の主張を伝える。

「くれる」（「天声人語」第18文、「春秋」第9文）は恩恵を表わす。どちらの例においても、行為者が対象に対して恩恵となる動作を施すのを第三者としての語り手が伝える。前者では「くれようか」と断定留保と未定の表現とつながっていて、期待と頼りなさを感じさせる。後者では「くれるのも今のうち」という「スピーディ」もしくは「軽佻浮薄な」体言止めとともに使われ、皮肉もしくは高みから見下したような印象を与える。

「～てほしい」は多く使われている（「編集手帳」第8文、「天声人語」第22文、「産経抄」第14文）。新政権誕生に際してのコラムなので願望を表わす表現が多いのも当然である。この表現を益岡は前掲書においてモダリティの表現として取り上げていないが、単なる事実提示に対して文の発話主体の感情や価値を添える標式の役割を果たすのでモダリティと考えてよいと私は考える。語り手がテキスト内の対象に対してある行為や状態の実現を望む表現である。

「～たい」（「天声人語」第19文）も願望を表わす。益岡は、このモダリティの用法を、実現の主体が1人称であるもの、つまり語り手の欲求を直接表わす用法と、主体が3人称であり、語り手の理知的な判断を伝えようとする用法に分けて、後者が報道文に多く見られるとしている⁽¹⁰⁾。この例では、実現の主体は「与野党」であり、語り手が注文をつけていると考えられる。「語り手の理知的な判断」として語り手以外の主体の行為を既定する以上、説教調の印象を与えることは免れないだろう。あるいは語り手が、自分たち新聞社の社員が世論を動員して終わらせるのだと大上段から意気込んでいるとも考えられる。興味深いことに「天声人語」の最終文では、「ほしい」という行為者に直接望む表現が「どうか」という哀願調の表現とともに用いられている。上から振りかぶったり、下から頼み込んだりという態度を、一貫性がないとするか、したたかとするかは読者次第であろう。

3-3. その他語り手の判断や感情を伝える表現

有標ではないのでモダリティ表現とはいえないものの、語り手の判断や感情を伝える表現がこれらのコラムには見られる。これは筆者による語彙の選択により、語り手の主観が表現される例である。言うまでもなく、判断や感情の負

荷がゼロである「中立」もしくは「客観的な」表現は現実にはない。したがって本論では、特に私がそのように感じるものを取り上げる。

「編集手帳」:

第3文「[...] 酔う人をたしなめるヤボは承知している。」第5文「[...] かなり聞こし召したようである」第7文「心もとない景気回復の足取りや、ギクシャクしている日米関係など [...] 憂いの種は目白押しである。」第10文「とがめる筋合いはないが [...]」第11文「[...] 心もち冷め加減が旨い。」

「天声人語」:

第13文「[...] 朝まで野党だった割には/なじみの顔が多い。」第14文「無論, [...]」第16文「新人議員の大群も [...]」第17文「こちらはひと夏で売った顔が目立つ。」第21文「そう, [...]」第22文「[...] どうか応接間の似合わない政権党であってほしい。」

「春秋」:

第3文「きのう晴れて首相になった [...]」第5文「美しい庭園で [...]」第6文「いやはや/時ならぬ観光地の風情だが [...]」第7文「[...]『宇宙人』などと表される超俗のおもむきに納得もいく。」第8文「物見高い世の人々はしかし, [...]」第10文「[...] あっという間に [...]」第11文「[...] 宇宙人なりや否や。」第13文「見応えがあるのは, [...]」第16文「世間はもう少レクールに [...]」

「余録」:

第3段落までは翻訳家の著作を引用要約したもので、語り手の判断感情からは省く。しかし使われている表現が必ずしも翻訳家自身のものであるという保証はない。第7文「国民をケムに巻く役人言葉と、耳に心地いいが内容空疎な政治家言葉」第9文「いわば国の統治をめぐる文化革命に挑む [...]」第10文「確かに [...]」第11文「[...] 会見はご法度となった」第13文「[...] 釈明なら要らない。」

「産経抄」:

やはり第5文までは演出家の著作の引用である。第6文「「…」幕がついに上がった。」第7文「「政権交代」の宣伝文句が効いて, 「…」」第11文「だからといって 「…」 ばらまき政策にばかり夢中にならない方がいい。」第13文「渥美ほどの見巧者ではないにしろ, 国民の政治を見る目は, 「…」 とみに肥えている。」第14文「何より 「…」 優先してほしい。」第16文「「…」 日本にとって一大事である。」第17文「第一, 国民はただの観客ではない。」

これらの例すべてに細かく解説を加えることは必要以上に煩雑になるので控える。またどこまで語り手の視点を表わすかという判断自体が私の視点に依る以上ある程度の恣意性は免れえず、数を比較しても余り意味はない。その上で特徴を挙げると、否定的な表現（「編集手帳」の「心もとない」、「ギクシャク」「憂いの種」, 「余録」の「ケムに巻く」, 「内容空疎な」、「要らない」など）および少なくとも微妙に軽蔑的な表現（「編集手帳」の「ヤボ」, 「天声人語」の「大群」, 「売った顔」, 「春秋」の「いやはや」など）が目立つ。また文語を戯語的に使っている例（「編集手帳」第5文の「聞こし召した」, 「春秋」の第11文「なりや否や」）があるがこれも読み手によっては小ばかにしている印象を受けるだろう。これらの表現の中には語り手自身に向けられているものもあるが（「ヤボ」）、多くは鳩山氏や他の政治家に関連して使われている。

他方、「余録」や「産経抄」では、語り手を主語とする動詞がなく、またモダリティの表現が少ないにも関わらず、判断や感情を示す表現がそれなりにあるのは注目すべきである。前半が他人のテキストの引用説明であることに依るとも考えられるが、実際には前半部分にも語り手を主語とする動詞文節やモダリティ表現はない⁽¹¹⁾。つまり読み手ははっきりと語り手の存在を知らされることがないまま、語り手の価値判断や感情を感じながらテキストを読み進めるのである。

全般に語り手を主語とする動詞文節を含む文は少ない。しかし語り手を主体とするモダリティは、その存在を十分に感じさせるほど頻出する。また語り手の視点を示す表現も目立つ。つまり読み手は、はっきりと名乗ることのない語り手の説明や主張を読むのである。

結び

以上、日本の5全国紙の1面に掲載されるコラムを、その内容と構成、文の長さ、語り手の主体という視点から分析した。どのコラムも鳩山内閣誕生を扱いながらも、様々な話題を取っ掛かりとしていること、それぞれが一応起承転結の構成を成していると言えること、コラムによって、文の長さにはかなりの違いがあること、どのコラムでも語り手の存在は程度の差はあれ常に感じられるものの、それを明確に示す指標は少ないことが分かった。5つの日刊紙を比較するのに便利であるように、たまたま同じ日に同じ題材を扱ったコラムを対象としたが、それぞれの日刊紙の一定期間内における比較は行えなかった。これにはかなりの大きさのコーパスに基づいた統計的な調査が必要となる。従って本論の分析をもってそれぞれの日刊紙のコラムに見られる傾向を引き出すことはできない。また新聞のコラムそのものの特徴を結論付けて言うこともできない。それでも1面のコラムの特徴を垣間見ること、それを各日刊紙の傾向、イメージと重ね合わせて考察を加えることはできるだろう。

コラム名は掲げられるがその日の題名はない。筆者名も書かれない。それでいて語り手の主張は打ち出される。論を積み重ねるのではなく、緩やかな起承転結らしき構成を持つ。このような文章を特に否定的にあげつらう理由はない。だからと言ってこれは特に推奨すべきものの書き方であろうか。「読解力」を養う場合に特に教材として適した文章であろうか。言うまでもなく、論文、情報伝達文、文学作品などテキストにはその用途に応じて様々な範疇がある。新聞のコラムのようなエッセイも読めるにこしたことはない。しかしこれが様々なタイプのテキストを読み書きする基礎となるべきものであるかは疑わしい。とりわけ語る主体を明確に位置付けずに主張を打ち出すこと、これは責任の所在をぼかした匿名の言説を発することである。他者を対象化するが、自らは対象となることを忌避するまなざしは¹²⁾、覆面をしたナルシスが増殖しつつある現在においてむしろ慎むべきではないか。

〈注〉

- (1) 例えば「編集手帳：五百字で世相を斬る。読売新聞の朝刊コラム」とある鉄道広告には小学校の教室内で一人勉強する少年の後姿が写っている。あるいは朝日新聞高松販売株式会社のサイト（2009年10月6日現在）には「受験に強

- い朝日新聞」とあり、さらに「2009年今年も朝日新聞が大学入試出題数ダントツNo.1」と銘打たれ、「朝日新聞掲載面ランキング」の第3位に「天声人語」が挙げられている（1位は「社説」、2位は「オピニオン」）。あるいは朝日新聞社の「天声新語コンクール」と題された企画は「過去の天声人語の第1パラグラフを出題し、それに続く文章を高校生が試験形式で作文する（早稲田塾協賛）」（2008年7月26日朝刊32ページ、2009年10月6日現在）という内容である。
- (2) Cf. 鈴木正道, 「誰が語っているのか—メディア言説における主体の問題—」, 『言語と文化』題6号, 2009年, pp. 51-73.
- (3) *Ibid.*
- (4) インターネット版では「天声人語」のみ表題を掲げ（2009年9月17日号は「鳩山内閣の船出」）, 「春秋」と「余録」では冒頭部分があたかも表題のごとく引用されている（それぞれ「これも東京の新名所なのだろう」, 「整備文一假が関の役人の書く文章をかつて…」）. 『編集手帳』と『産経抄』には全く表題が添えられていない。
- (5) 例えば, 草柳大蔵は『朝日新聞』を批判しつつも朝日新聞社の「名文記者」の特徴として体言止の多用を指摘している. Cf. 「現代王国論・朝日新聞」, 『文芸春秋』, 1966年11月号, p. 114.
- (6) Cf. 本多勝一, 『日本語の作文技術』, 朝日文庫, 1982年（2001年）, pp. 217-219.
- (7) Cf. 鈴木正道, 「誰が語っているのか—メディア言説における主体の問題—」前掲書.
- (8) 新聞記事のモダリティ表現の出現頻度に関する研究として例えば, 鶴木眞編著, 『客観報道—もう一つのジャーナリズム論』, 成文堂, 1999, 第4章, 藤田真文, 「新聞記事における論評の表明—モダリティ概念によるテキスト分析—」, pp. 93-125が挙げられる.
- (9) 無標である断定の表現が, 主観性をもたない, 従って語り手の存在が感じられないと言い切れるかは議論の余地があろう. 断定保留が多いテキストで断定が現れると, それだけで強い主張を感じさせることがある. ここではこの問題には立ち入らない.
- (10) 益岡隆志, 『日本語モダリティ探究』, くろしお出版, 2007, p. 230.
- (11) ちなみに「余録」には翻訳家の判断, 感情を示す表現として第3文の「いや」, 「すら」, 第4文の「分りにくく, 漠然とした抽象的な」, 「際限なく」, 第6文の「わざと」, 「一見分かりやすい」, 「不思議な」などがある. これらが翻訳者の用いた言葉を語り手が引用したものなのか, 語り手が考え出した言葉なのかは定かではない.
- (12) 被取材者と対象化するまなざしとしてのマス・メディアに関しては, cf. 鈴木正道, 「まなざしとしてのマス・メディア—対象化はアポリアか?—」, 『言語と文化』第5号, 2008, pp. 37-58.